

# 五才児の言語指導の実際

鈴木 正子

## ◎グループで紙芝居をつくる

私のクラスの本箱の中には、今春卒業した子どもたちのつくった紙芝居がしまっている。開くと今でも絵と絵の間から幼児たちのさざめきが聞こえてくるような気がする。今日はその紙芝居つくりについて書き残してみようとおもう。

期間は二月上旬の約二週間、参加した幼児はクラス全員の四十名であった

### 一、あそびをとりあげた動機

五才児になると社会性の発達とともに自分の考えをかなりはっきり表現できるようになり、又同時にひとの話もよく聞きとることができるようになる。そのために友だちとの話し合いも活発になってくる。

又この時期になると物語りに興味をもってきて、簡単なものならば話の筋も理解できるようになる。そのような点からみて話す

ことや話し合うこと、又物語りを構成していく経験が総合的にできる「グループによる紙芝居づくり」は、五才児の言語指導にふさわしいものであると考えてとりあげた。

### 二、ねらい

○友だち同志で話し合いをすることができる。

○簡単なお話の筋のあらましや登場人物がわかる。

○友だちと一緒にみんなで作った紙芝居をみたのしむ。

○良い話し方にきづく。

○みんなにわかるように話す。

### 三、計画のあらまし

○日頃からいろいろな紙芝居に親しませる。

○紙芝居ごっこをして遊ぶ。(導入)

○紙芝居をつくる相談をする。

○グループにわかれて紙芝居をつくる。

○つくった紙芝居をかわるがわるして遊ぶ。

○自分のかいた場面のお話を録音する。

○録音したテープを聞きながら紙芝居をみる。

○録音を聞いて気のついたことを話し合う。

○話し方に気をつけながら紙芝居をする。

#### 四、指導経過と指導上気をつけたこと

○日頃からいろいろな紙芝居に親しませる。

日常紙芝居をみせる時、物語りのおもしろさを感じさせるだけでなく、登場人物や話の順序などにも関心を持たせるように時どきみたあと、そういうことについて話し合いをしてきた。

○紙芝居ごっこをして遊ぶ。

今までにつくった遠足の紙芝居（かいた絵をあとで構成して紙芝居にしたもの）をしたり絵本を重ねて紙芝居のようにして遊ぶ。今回は自然にこのあそびをはじめたので大変導入しやすかった。

#### 以上導入段階

○紙芝居づくりの相談をする。

導入によって紙芝居への関心が高まってきた。「今日は好きな紙芝居をみんなでつくりましょうか」と話しかけると、よろこんで、話し合いに入ってくる。

紙芝居をつくった経験はこれまで何度かあるがグループによる紙芝居づくりは、はじめてである。好きなお友だちとくませたところ、男児と女児がわかれてしまい約十人ずつの四つのグループ

ができあがった。テーブルをかこんでグループごとの相談が、はじまったが、今までに時どきみんなで話し合う機会をつくったり、お正月にはグループによるすごろくづくりなどを経験しているの、すぐ話し合いに入ることができた。

最初はテーマをきめたがグループによっては意見が対立してしまったところもあり、最後はじゃんけんや多数決によって解決した。次に場面をかく役割りの相談になったが、教師が話し合いに仲間入りして物語りの順序を整理したり、お話を区切って場面をきめてやりとりして相談が進行しやすいうにした。

二つの場合とも、発言力の強い子どもにリードされる傾向があるので、順に意見をいわせて、どの子にも話をさせるように気をつけた。

約二十分位たって「一寸法師（男児）」「金太郎（男児）」「三匹の仔豚（女児）」「白雪姫（女児）」の四つをつくることに落着いた。みんながよく知っている物語りにきまったことは相談がうまくできた結果によるものと感じた。自分たちでテーマをきめ、自分のかき場面をきめた幼児たちは、今度は意気こんで次の活動へと移っていった。

○紙芝居をつくる。

絵をかく段階では前にみた紙芝居の画面などにとらわれず自由に表現させるようにした。大部分の子どものびのびと創意をいかしてかけたような気がする。

大体一人一場面をかけたが場面の多い白雪姫では一人の幼児が二枚もかくようになり、でき上がるまでに二・三日かかったが大作をものにして大変満足だったようである。

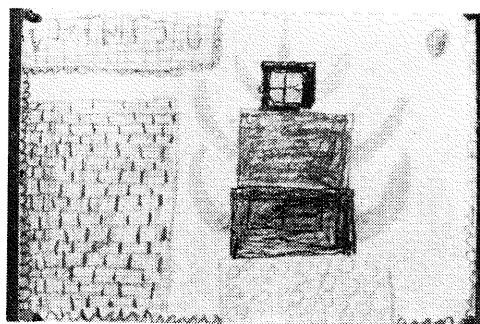
○つくった紙芝居をかわるがわるして遊ぶ。

でき上ったグループごとに紙芝居の上演がはじまる。かいた場面をかいた子どもが説明したり一人の子どもが全部通したりしてなかなか活発。時には食休みの時間を利用して他のグループと見せ合ったりした。

説明はすきなようにさせたが最初は「こうしたの」とか「ああしたの」とかいう話し方だったのが途中から「しました」とか「です」とかいう話し方になっていった。ここでは自分のすきなように話すことに重点をおくとともに、友だちのする時は静かにみるように指導した。

○自分のかいた絵の話を録音をする。

自分のすきなように話す経験から、ひとにわかるように話す経験へ発展させるために録音を始めた。もちろん幼児にとつてはおもしろい録音あそびである。前にも歌や、お話を吹込んだことがあるので我先にとやりがった。一人が全部すると時間がかかるので、自分のかいた絵の話だけをするにした。いくらか緊張したせいか話がふだんの時よりみじかく、自由性がないうような気がした。次にあげた絵と言葉は中のひとつ「一寸法師」を写しとったものである。



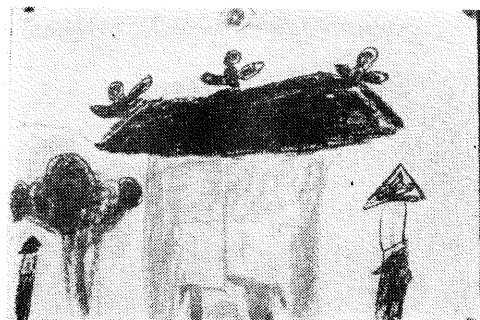
①

これから一寸法師のかみしばいをします。

むかしあるところにおじいさんと、おばあさんがいました。

おじいさんとおばあさんには、こどもがいませんでした。

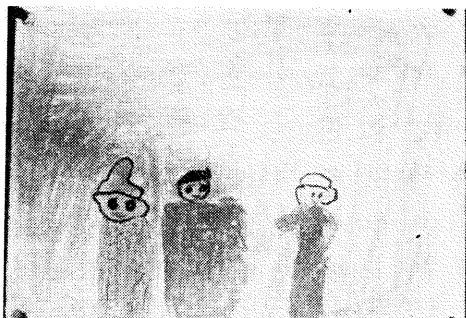
(てつお)



②

あるひおじいさんとおばあさんはどうか、こどもをくださいと、じんじやにおがみにいきました。

(すみお)



③  
 するとおばあさんのゆび  
 から、さんせんくらいいの  
 ちいさなこどもがうまれま  
 した。

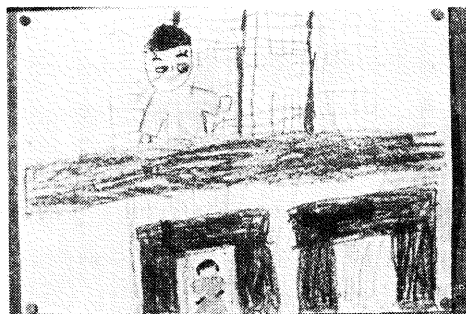
(すみお)



④  
 そのこはずんずん大きく  
 なって、みやこにのぼるこ  
 とにしました。

おわんのふねとはしのか  
 いと——はりをもって、の  
 ぼっていきました。

(やすよし)



⑤  
 いっすんぼうしはみやこ  
 へのぼっておとのさまのも  
 んへ、こんにちわといっ  
 ても、でてこないの、お  
 ごえをさげんで、いいま  
 した。すると、おとのさまが  
 でてきて、「げたのかげでか  
 らわからないので、もう、そ  
 う……そんなところにいたの  
 か」といいました。(まさる)



⑥  
 いっすんぼうしはおひめ  
 さまと、おともだちになり  
 ました。

まいにち、まいにち、べ  
 んきょうしながら、あそん  
 でくらししました。

(さとる)



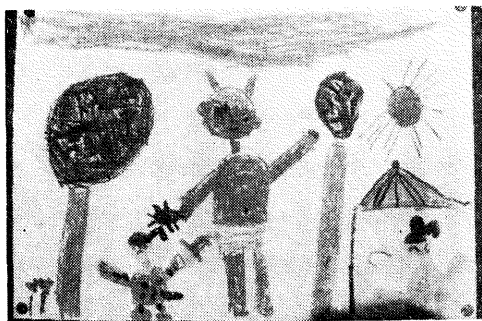
⑦  
あるとき、いっすんぼうしは、しよみず（清水のま  
ちがい）のおてらにいきま  
した。

（まもる）



⑧  
おてらのかげから大きな  
おにが、いっぴき、でき  
ました。いっすんぼうし  
に、とびかかりました。

（たかし）



⑨  
いっすんぼうしうーんと  
いっすんぼうしおにとた  
かいました。  
はりのかたなで、ちくり  
ちくりとさしました。

（じゅん）



⑩  
くるしい、おにはくるし  
い、くるしいとにげていき  
ました。  
つちで（打ち出のこと）  
のこづちを、おっことして  
いきました。

（たかゆき）



⑪

おひめさまは、それを(ひ  
聞えない

ろって) いっすんぼうし、

大きくなれ、大きくなれ、

大きくなれ、とうちでのこ

づちを大きくなれとふりま

した。そうするといっすん

ぼうしはどんどんおおきく

(聞えない 聞えない

(なつて) いま(では)り

っぱなわかものになりました

た。(ともゆき)

これは一例であるが、全体をとおしてみて、良く知っているお話だったせいか割合に上手に話せたとおもう。ただ中にいくつか長い話になった時、話の筋が混乱したものがみられた。又話の長さについて個人差がめだち、その原因などについて考えさせられた。

○録音を聞きながら紙芝居をみる。

全部録音ができたので今度はそれを聞きながらみることにした。最初はひととおり、とおして見た。録音機から流れでてくる自

分の声や友だちの声が珍しく、ひとが変るたびに笑ってにぎやか。四編をあきないでたのしむ。

次の日には「だれのお話が良くわかるか」ということに気をつけ聞くことにした。聞いたあともう一度かけ、ひとつひとつについて話し合った。

先ず話をした本人に聞いてみようとしたが笑ってばかりいて駄目なのでお友だちにいってもらうことにした。

一寸法師を例にあげてみると、

①から④まではとても上手、大きい声でゆっくりでよくわかる。

⑤—何が何だかわからない。

⑥—よくわかる。

⑦—「しよみず」じゃなくて「きよみず」

⑧—おにのようにこわい声をだした所がおにがでてくるようではない。

⑨—はやすぎておかしい。

⑩—「つちでじゃない」「うちで」

⑪—きこえないところがあった。

などという。なかなか良く聞いているのに感心した。(きよみず・うちでは物語りにくわしい幼児の発言)

話し合ったあと、実際に正しい話し方で、紙芝居の説明をいって見たが、声の大きさとか、話す速度とかについては割にたやす

く理解できたようだった。しかし何を言っているのかわからない話を変だなと感じても自分たちで直すことはできないので、それについては教師が意味がわかるように、みじかく区切ったり置き変えたりして話してみせた。

例えば「一寸法師」⑤の場合は次のように。

一寸法師は都へのぼってお殿様の所へいきました。

「こんにちわ」といいました。

でもだれもできませんでした。

今度は大きな声でいきました。

するとお殿様がでてきて、下駄のかげにいる一寸法師をみつめました。

おとのさまは「そんなところにいるのか」といいました。

それで本人も納得したらしく、うなずいたりまねをしたりしていた。

この段階では幼児自身でよい話し方に気づくように誘導するようになり心がけた。又、友だちの話ぶりについて話し合う時はあげあしとりにならぬよう、何時も自分のこととして考えさせるように気をつけた。

○話し方に気をつけながら紙芝居の上演がつづいたが自分の話のくせなどに気づいて直そうとする傾向がみえてきた。

もう一度上手な話し方に直した録音を試みようかとおもった

が、あまり一度に完全なものにしようとすることに危険を感じてとりやめた。話し方については今後も折にふれ、あせらずに指導して行こうとおもう。しまいには年少組の友だちにしてあげたり、クラスの外にまで発展して、長くおもしろく遊べた紙芝居づくりだった。

## 五、指導後の感想

○全体としては、幼児にとって高度な話し合いや話し方をたのしく遊びながら指導できてよかったとおもった。

○話し合いへのはいり方だが、今回は一度にグループをつくってみたが、段々につくって行っても良いのではないかと考えた。

○話し方の指導をする場合、声の大きさや速度についての指導は比較的しやすかったが、意味がわかるように話をさせる指導がむずかしかった。ふだんから感じていたことだったが実際あつてみて、その指導法について考えさせられた。

今後の問題としていきたいとおもう。

## おしまいに

この六月の小学校の研究会で、一年生の授業を参観した。この紙芝居づくりの作者たちが又一段と成長して、かなり上手に自分の考えたことなどを発表していたのを見て、大変うれしくおもったことを、つけ加えてこの稿を終ろうとおもう。